分娩直後の母親の行動と母子相互作用

野村紀子，島田信宏，
岡崎寿美子，黒田　緑，
石原　昌，豊田淑恵，
島袋香子，畠山良枝，
大貫寿美子，長南記志子，
林　輝雄，赤嶺容子，
大森まよみ　（北里大学病院）

研究目的

子供と，その母親との結びつきが，乳児の生得型反応と，母性行動の相互作用によって成立することは，周知のごとくである。しかし，母親が，その乳児にアタッチメントを成立させていくプロセスについては，十分解明されているとはいえない。「ボウルビィー」によれば，初期のアタッチメントは，母親の行動によって維持されるという。

私達は，数多くの分娩の場面に接し，分娩直後の母親と，その新生児との初回対面時に，母親によって，その行動に違いのあることに気づいていた。すなわち，始めての我児との対面時に，己から手を出して，子供にふれようとする母親群，他は子供にふれない母親群である。出生直後の，母子接触場面を通して，それぞれの母親群の背景の違いや，因子について調査した。

調査対象および方法

調査期間　昭和５７年２月１０日～昭和５７年１１月３０日。

調査表にもとずき，分娩目的で入院した産婦（無作為）に対して，1）最終学歴。2）妊娠，分娩歴。3）出産に対する態度。4）家族，および夫との問題の有無。5）妊娠中の乳房の手当ての有無。などをチエックした。

その後，分娩に関しての情報，（麻酔の種類，分娩様式）をチェックし，新生児との初回対面時の，母親の言動を観察した。さらに，産褥期における乳汁分泌量と，新生児については，新生児の体重減少率を調べた。

調査数，８６９名，（初産婦４３５名，経産婦434名）であり，有効調査件数は，８４６件で，９７％である。

調査結果

調査表３，2）母親が手を出して子供にふれようとしたか。の項では，子供にふれた母親は，６６４名（７８.５％）で，初産婦３３０名（７８.6％），経産婦３３４名（７８.４％）を示した。７８％以上の母親が，子供にふれている。3）子供のどこにふれたか。については，手（２４０名）：初産婦（９０名），経産婦（１５０名）。足（３５名）：初産婦（２２名），経産婦（１３名）。頭（２２４名）：初産婦（１２４名），経産婦（１００名）。顔（２６２名）：初産婦（１５７名），経産婦（105名）であった。初産婦の母親では，顔にされるのが一番多く，次いで，頭，手，足の順になっている。経産婦の母親では，手が一番多く，顔，頭，足の順であった。抱きしめる行動は，初産婦，経産婦共にそれぞれ２３名の母親にみられ，乳頭を新生児に含ませた母親は３名であった。ほうずりの行動をした母親は，１２名で，初産婦８名に目立っている。

初回対面時の母親の表情では，子供にふれる，ふれないにかかわらず，微笑などがみられた。しかし，母親の発する言葉には差がみられた。すなわち，子供にふれた母親群は，その新生児に語りかける発語，（あら，貴方女の子だったのネ，そんなに泣かないで，お母さんはとっても大変だったのよ。こんにちわ。）などが多かった。子供にふれない母親群では，新生児に語りかけるのではなく，勤務者に対しての発語。（体重はいくらですか。五体満足ですか。ありがとうございました。）が多かった。また，このような母親群の言

葉は，無視，拒絶に近く，子供への否定的な反応であった。（気持悪い。二重じゃないのネ。お産が大変だった。変な感じ。また男か。女の子じゃないの！。女の子ではもう一人がんばらなくてはならないのかしら！）

子供にふれる母親群では，（お父さんにそっくり。小さくてかわいそう。うそみたい。夢みたい。女の子でよかった。元気でよかった。主人にみせたい。私の赤ちゃん。これからがんばらなくちゃ。前の子と同じ。お兄ちゃんに似ている。色の白い子だわ。）などの子供を受容する肯定的な反応であった。

ついで，子供にふれた母親群と，子供にふれない母親群について，調査表にもとづいてみてみると，1）最終学歴では，中学校卒業の母親では，子供にふれる母親群は低く，65.6％を示した。（初産婦75％，経産婦60％）。高等学校卒業の母親では，76.1％を示した。（初産婦80.2％，経産婦74.8％）。短大，大学卒業の母親では，80.6％を示した。（初産婦78.2％，経産婦80.6％）。専門学校卒業の母親が子供にふれる割合は一番高く，87.5％を示した。（初産婦，経産婦共に87.5％）。なお，この専門学校卒業者とは，看護婦，助産婦，保健婦学校の卒業者であった。学歴によっての接触度では，義務教育以上の母親に，子供にふれる母親群が多かったといえる。

3），出産に対する態度では，計画出産か，無計画出産（妊娠）かの項によったが，計画出産（妊娠）であった母親の78.1％が，子供にふれた母親群であった。無計画出産では，78.8％を示した。

家族，および夫との問題については，何らかの問題があると答えた母親に，子供にふれる母親群（84.6％）が多かった。（初産婦83％，経産婦87.5％）。しかし，問題の内容を探求してはいなかったので，出産を母親が受容しているか，否かとの関連を持たせて考察することはできなかった。ちなみに，問題がないと答えた母親群の接触度は，77.8％，（初産婦77.9％，経産婦77.7％）であった。

妊娠中に乳房の手当てを行っていたか。の項については，子供にふれた母親の78.5％（406名）。（初産婦78.8％，231名，経産婦78％，175名）が乳房の手当てを行い，子供にふれない母親の77.1％（226名），（初産婦76.6％，82名，経産婦77.4％，144名）が，乳房の手当てを行っていなかった。

分娩時の麻酔の種類と分娩様式についてみてみると，バランス麻酔を使用した母親では，77.4％が子供にふれている。硬膜外麻酔では，89.1％を示し，局所麻酔では100％の数値を示した。新生児との初回対面時に，泣き出したり，さかんに語りかける母親をみていて，麻酔によって，その理性の抑制がとれているからではないか……と考えたのとは全く逆の結果であった。

分娩様式では，NSDによる母親群の67.4％。吸引分娩，79.7％。鉗子分娩89％。骨盤位娩出術，86％の割合で，子供にふれる母親群が多かった。このことは，分娩に困難を要した母親ほど，子供に対してのいたわりが強いのではないかと考える。

出生から，何分後に対面したか。については，30分以内，79％。31分～60分，76％，61分～90分以内，85％。90分以上，87％。が子供にふれる母親群であった。当院の場合，バランス麻酔が多く使用されていることから，麻酔の覚醒は，分娩後1時間前後を要する。また，出生後1時間前後は，母親への分娩後の処置が完全に終了していないこと。などを考え合せて，母親と新生児との対面は，母親への処置が完全に終了してから，行なったほうが，母親の子供への関心が高まるのではないかと考えられる。もし，麻酔のため，意識が不鮮明で，新生児への関心が薄いとすれば，マザーリングアタッチメントの面から，分娩時の麻酔使用に，一考を要するのかも知れない。

乳汁分泌量については，子供にふれた母親群の平均分泌量（425.5㎖）に対し，ふれない母親群の平均分泌量（389㎖）であった。（この場合の，平均分泌量とは，産褥1日目より，産褥5日までの総量の平均分泌量）。妊娠中に，乳房の手当てを行っていた母親が多いことからも，この結果は当然であるといえる。また，乳房への刺激だけではなく，子供とのSkinshipによって，母体のプロラクテン値が上昇するという事実があることから，新生児と，早朝に接触した母親群に，

乳汁分泌量が増加するともいえる。

新生児の体重減少率は，母親がふれた新生児の減少率，第1日目，3.15％，第3日目，4.84％，第5日目，3.48％を示した。母親にふれられていない新生児では，第1日目，3.35％。第3日目，5.0％，第5日目，3.62％を示し，母親にふれられた新生児が，やや位値を示した。単に，乳汁分泌量との関係なのか，今後の研究課題としたい。

結　　論

出生直後の，初回対面時に，自発的にその新生児にふれる母親群と，ふれようとしなかった母親群とに，著しい差をみることはできなかった。しかし，子供にふれる母親群の傾向としては，ある程度の教育を受けた母親であり，妊娠も計画的で，妊娠，出産に対しての積極的姿勢のある母親群であるといえる。

また，分娩時の麻酔によって，理性の抑制がとれ，感情的になるのではないか…という考えがあったが，今回の調査によって，逆に母親の意識が鮮明なほど，愛情の表現が豊かで，子供へのタッチングが行なわれるということが明確になったと考える。

対面時間については，麻酔覚醒の時間が，一定していないこともあって，明確にはできなかった。しかし，分娩後の，母親への処置が，1時間前後要することを考え合せ，母親への処置や，不自然な体位がとかれ，分娩を終了したという安堵感と共に，子供への関心が深まると考えられる。

夫や家族とに，何らかの問題があると答えた母親群については，問題があることを，その出産を望んでいたか，否かとは別の問題である。しかし，分娩が困難であった母親群と同様に，その新生児に対して，“いとおしさ”でていると考える。

子供にふれる母親のなかには，ほうずりをしたり，乳頭を口に含ませようとしたり，また，抱きしめる母親も多かった。マターナルアタッチメントの有無や，程度が，その子供の発育成長に大きくかかわるとされている現在，この初回対面時にみせる，母親の行動の差が，大きな意味を持つものと考える。

参 考 文 献

1）モンタギュー，A著：タッチング
平凡社，1981

2）ボウルビィ，J，著，黒田実郎訳：
母子関係の理論（愛着行動），

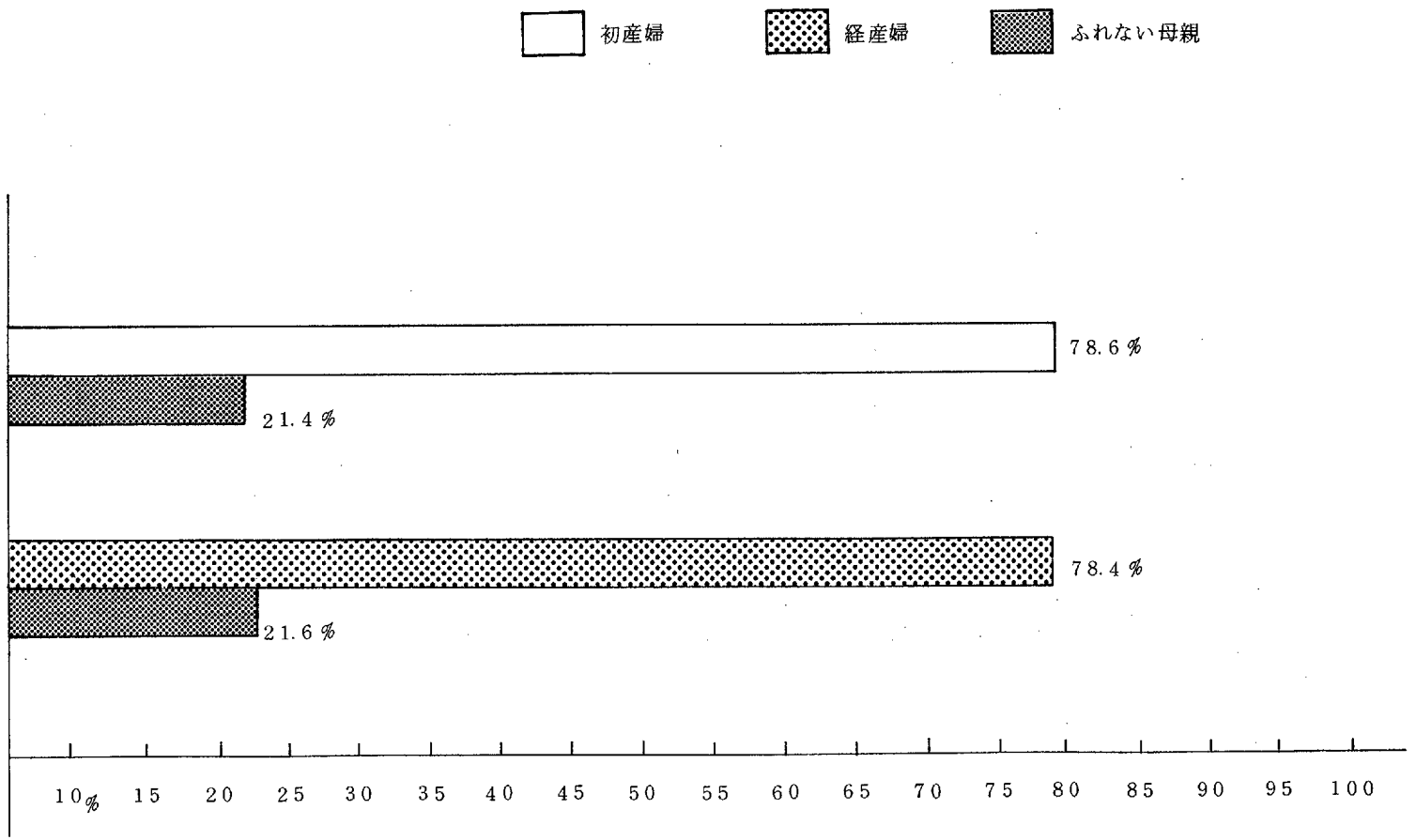
3）スピッツ，A著，古賀行蔵訳
母－子関係の成りたち
同文書院，1981

4）平井信義編：母性の研究
同文書院，1981

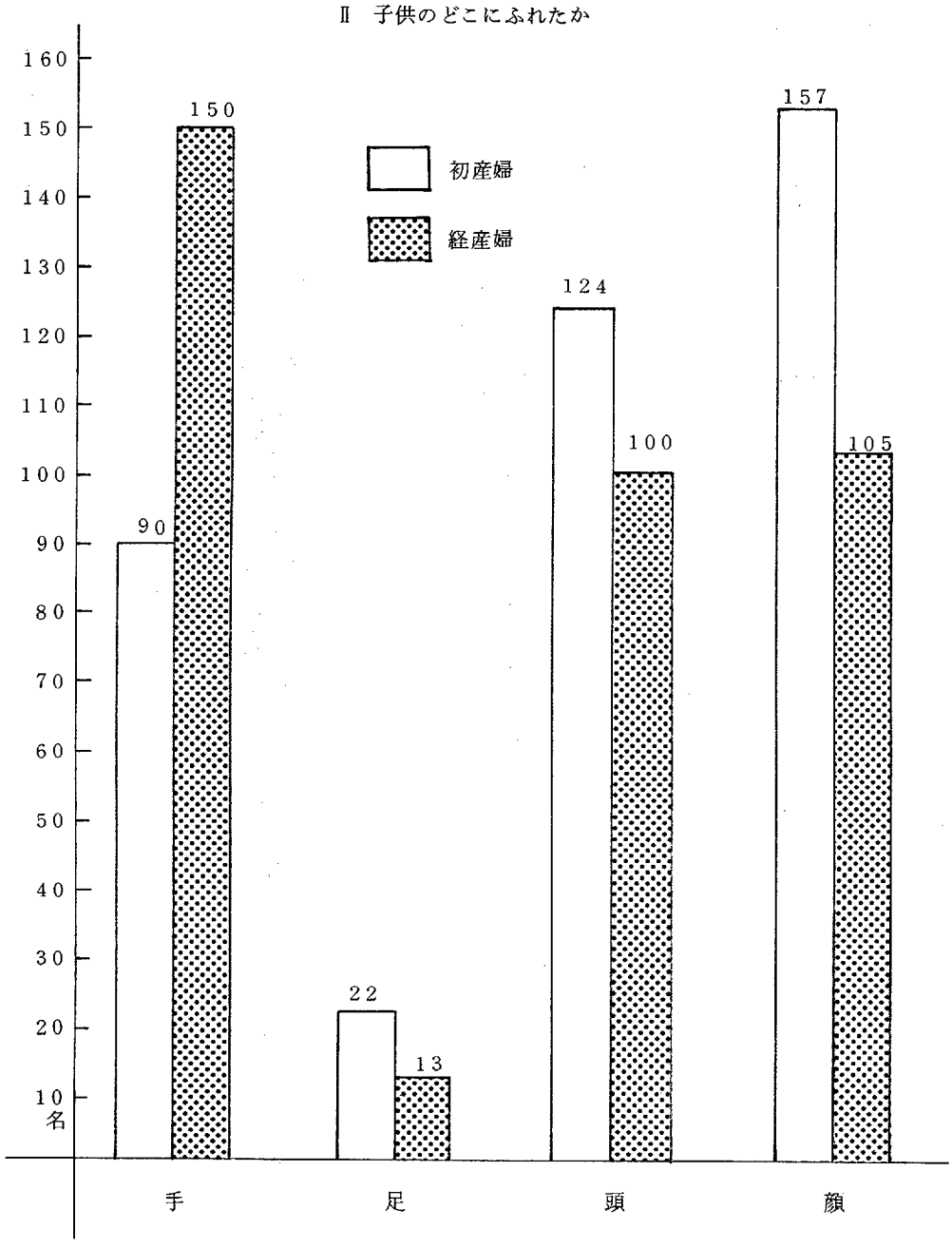
5）小嶋謙四郎著：乳児期の母子関係
医学書院，1981

6）クラウス，M，H，ほか著，竹内徹ほか訳：
母と子のきずな－母子関係の原点を探る，医学書院，1909

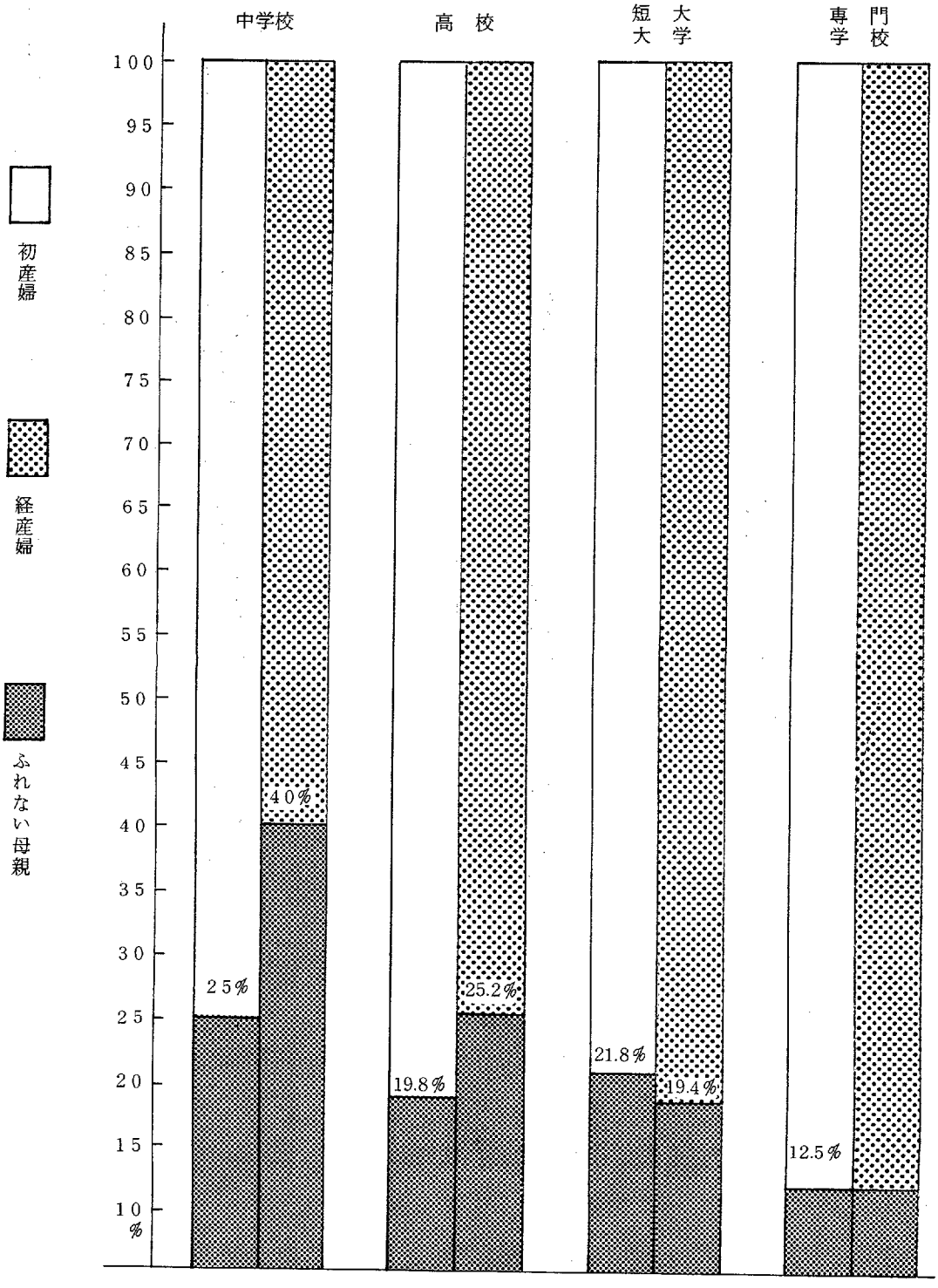
I　母親が手を出して子供にふれたか



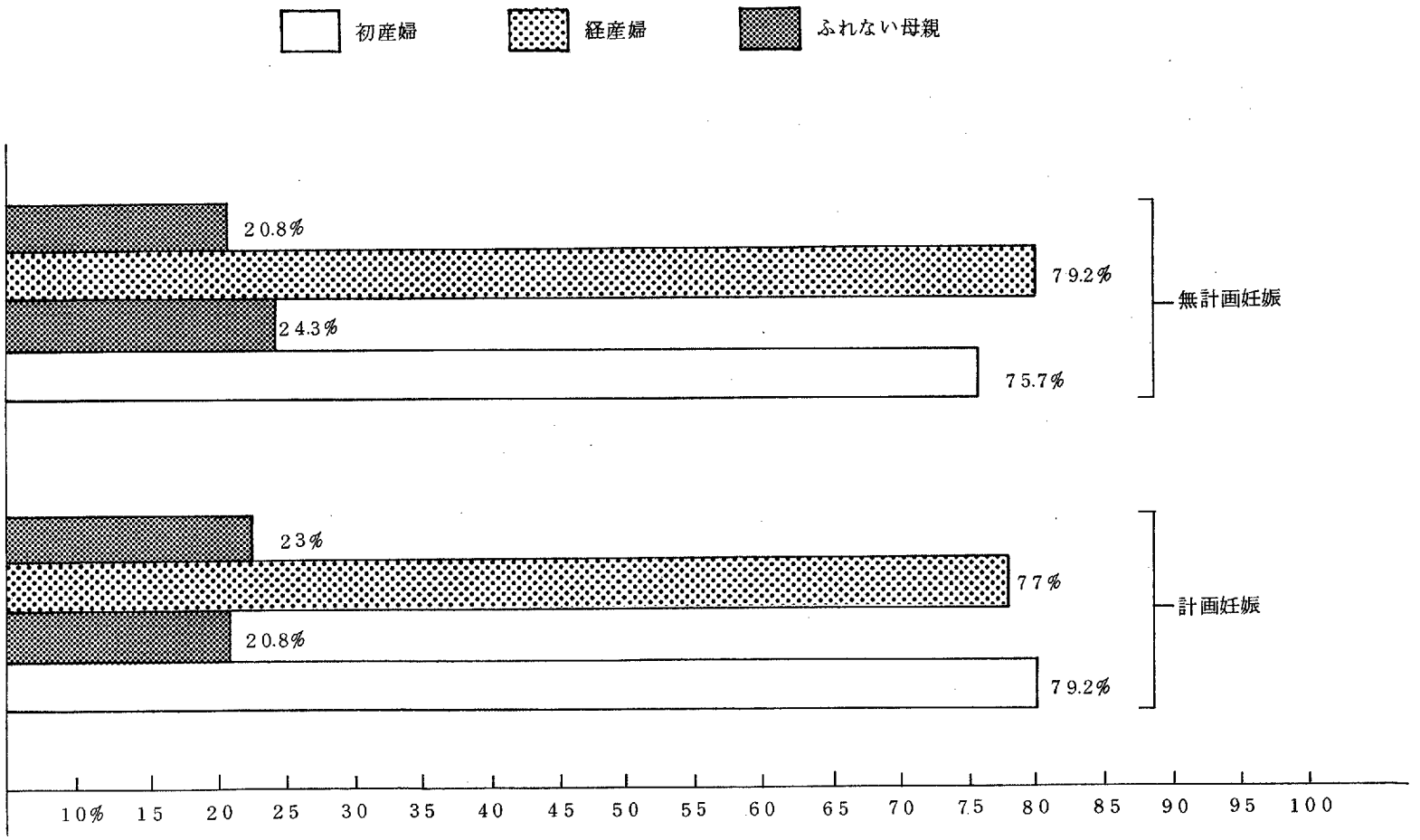
Ⅱ　子供のどこにふれたか



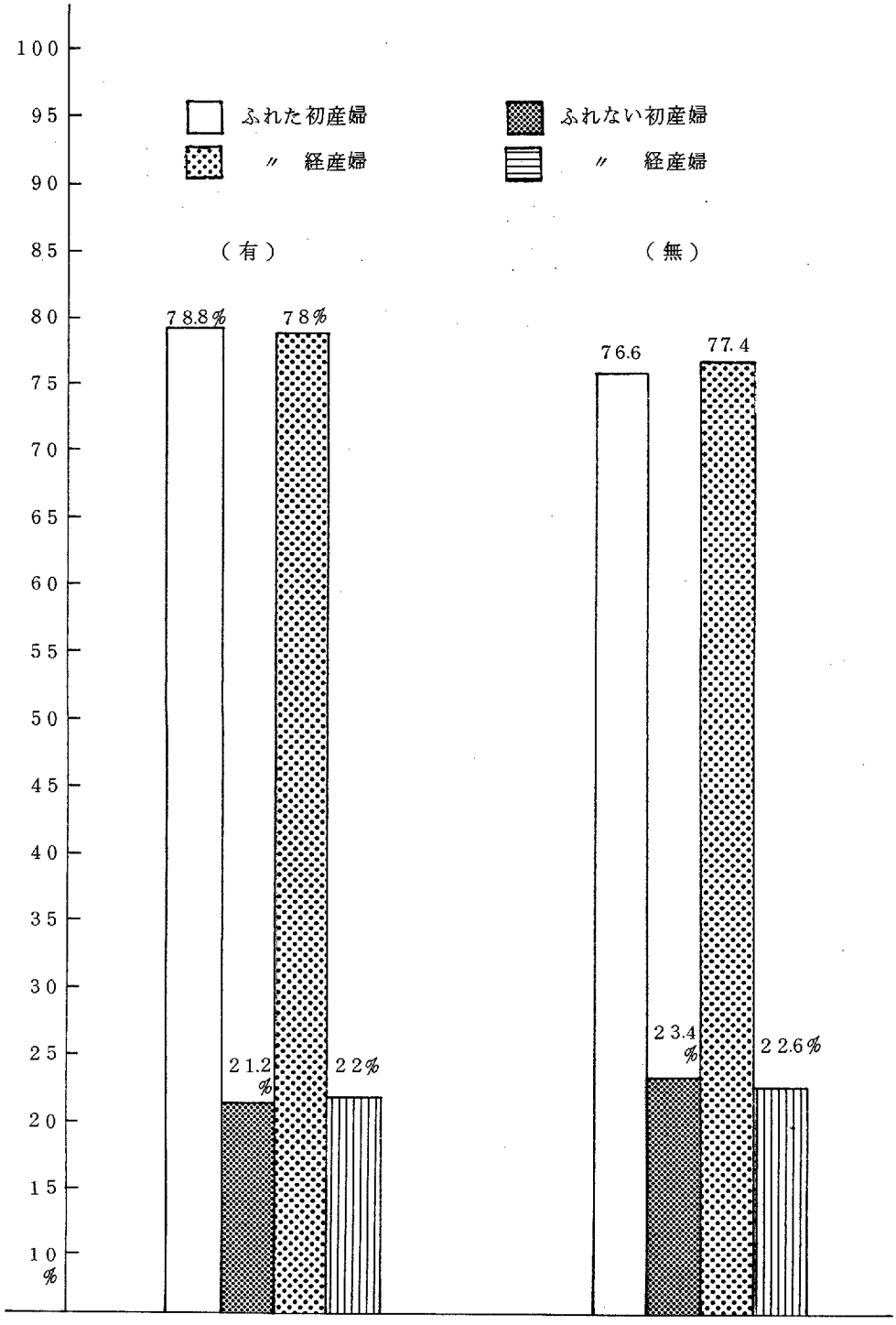
Ⅲ　母親の最終学歴と新生児への接触度



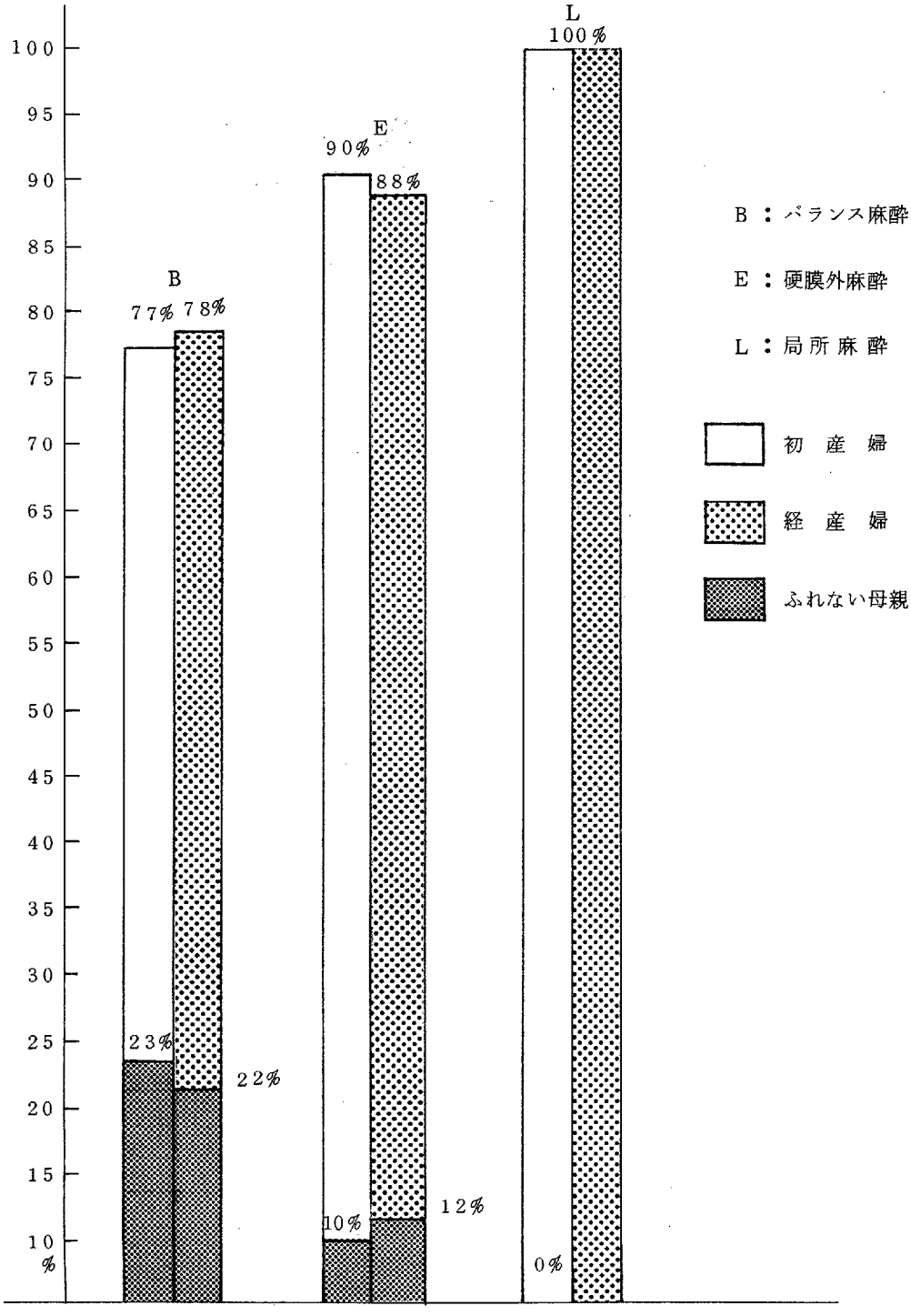
Ⅳ　出産に対する態度と新生児への接触度



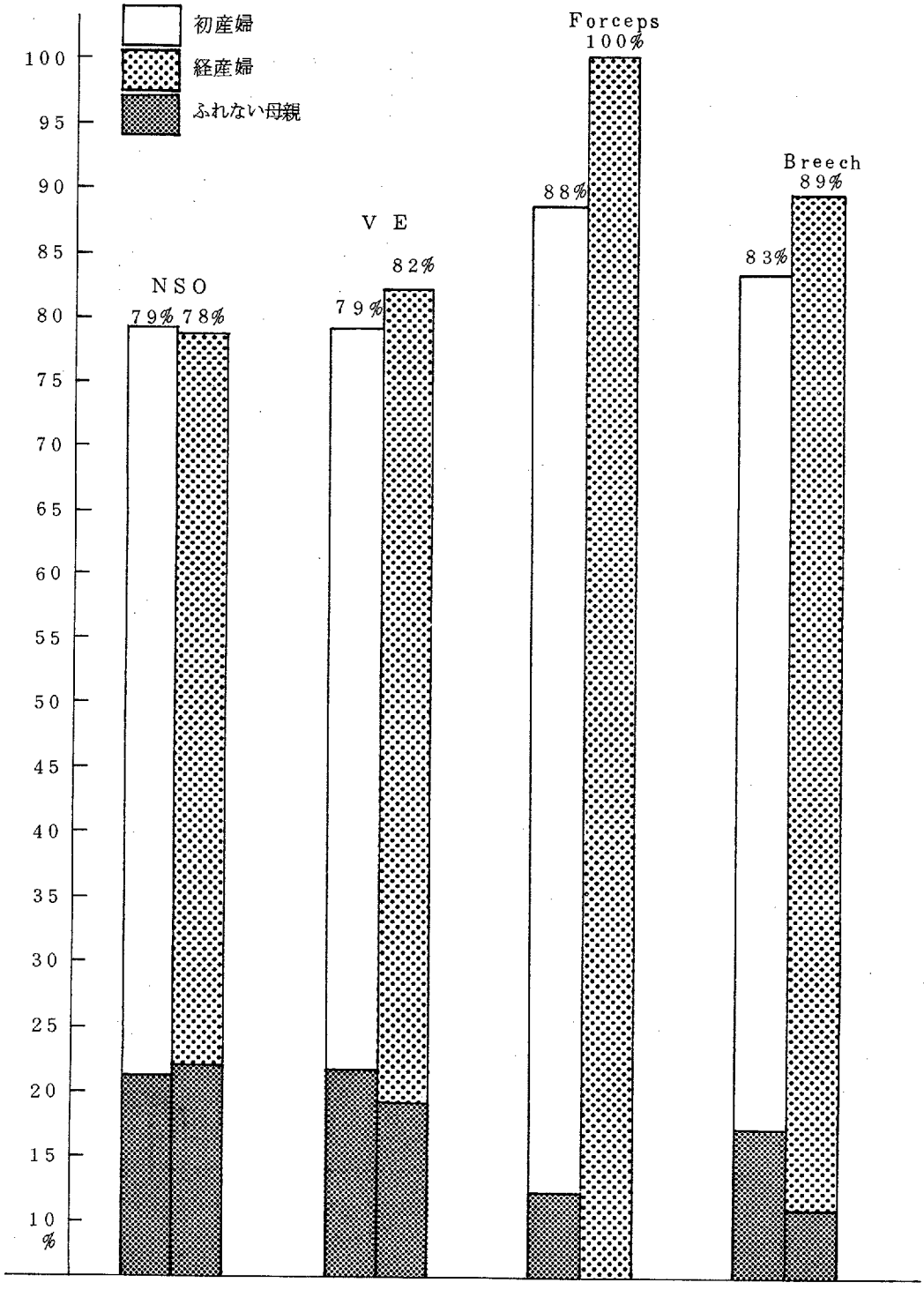
V　妊娠中の乳房の手当て
の有無と新生児への接触度



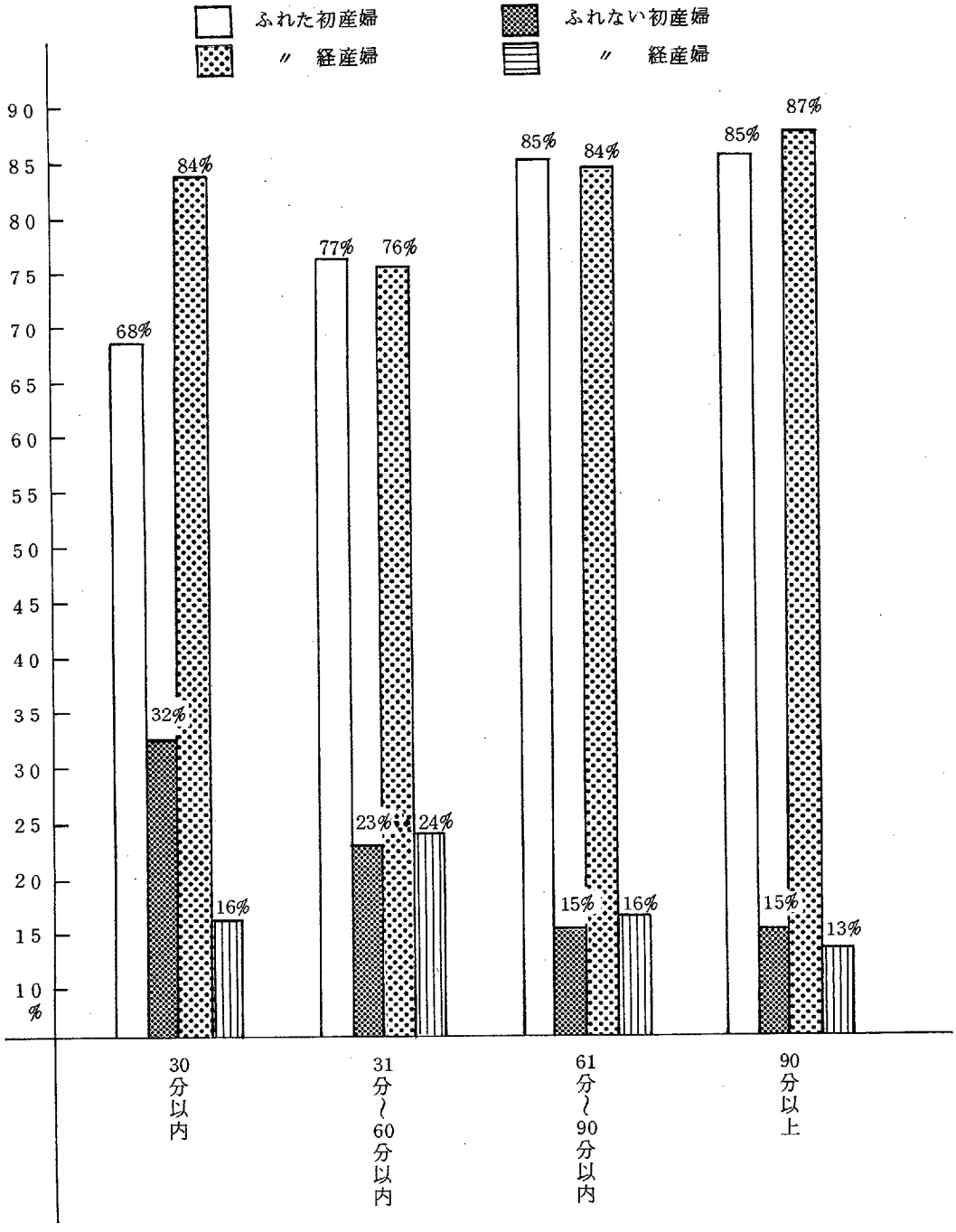
Ⅵ　麻酔の種類と新生児への接触度



Ⅶ　分娩様式と新生児への接触度



Ⅷ　出生後の対面時間と新生児への接触度



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

子供と,その母親との結びつきが,乳児の生得型反応と,母性行動の相互作用によって成立することは,周知のごとくである。しかし,母親が,その乳児にアタッチメントを成立させていくプロセスについては,十分解明されているとはいえない。「ボウルビィー」によれば,初期のアタッチメントは,母親の行動によって維持されるという。

私達は,数多くの分娩の場面に接し,分娩直後の母親と,その新生児との初回対面時に,母親によって,その行動に違いのあることに気づいていた。すなわち,始めての我児との対面時に,己から手を出して,子供にふれようとする母親群,他は子供にふれない母親群である。出生直後の,母子接触場面を通して,それぞれの母親群の背景の違いや,因子について調査した。